

---

# clover00

群青 坊哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

clover00

### 【コード】

N8358G

### 【作者名】

群青 坊哉

### 【あらすじ】

どうすればいい？好きで、好きで好きで、壊してしまいそうなくらい。こんな想いは 一体、どうしたらいい？（\*この小説は、Windows用ノベルゲーム”clover”の短編集です。）  
ゲームはhpにてダウンロード可能（）

^ 2 2 5 0 1 1 | 2 2 6 6 5 5 6 5 6 5 6 4 . V

(1) (1) (1) (1) (1)

天沢萌は中庭のベンチに腰掛けて、一人、ジャスミンティで喉を潤していた。

夏冬限定で、たまに一人になりたい時に来る場所である。丁度木陰になるその場所は如何に生徒達が嫌煙している真夏の真昼　太陽が頂点に上り詰めた炎天直下な環境にあらうと辛うじて心地よい空間を提供してくれた。恐らくこうだった場合は校内の方が豊富なだろうが、萌は室内よりは外を好んだ。

現在は四時限目と五時限目の間の少しだけ長めの中休み。昼休みと呼ばれる時間帯である。

仲の良いクラスメート達は皆それぞれ思い思いの場所で過ごしていた。普段萌と行動を共にしている女生徒二人は未だクラスで弁当をつついている。

尤も、萌は団体行動から外れない範囲で、大概一人で行動する性質だった。人の後を付いていくとか、人と一緒にないと不安になるといった類の人間には属していない。彼女と仲の良い女生徒の一人がそういった性格をしていて、萌は常々、女の子らしいなとほんの少しのコンプレックスを抱くのだった。

そんな天沢萌が常に動向を気にかけている人物といえば、ただ一人。黒髪の一髪付き合いの長い

「萌ちゃん」

と、低めの、どこか色気を含んだ声が自分を呼んだ。

ペットボトルを口につけたまま振り向いて姿を探すと、強い日差しの中を爽やかな笑みを浮かべてこちらに歩み寄る男子生徒の姿がすぐに見つかった。

「探した。こんな所に居たのか」

その人物は大きな身体を窮屈そうに折り曲げて萌の隣に腰掛ける。そう言う割りにこの人物はこの暑い中、汗一つかいていない。手にしていた牛乳パックにストローを指すと一口飲み込んだ。

「修二君？ 一人？」

ペットボトルを離れた直後、不可解な物でも見たという表情で萌が声を上げると端整な顔がこちらを向く。

明るい鳶色の瞳が、かけられた言葉の真意を問いたげに萌を見た。

「いつもだったら修二君親衛隊の女の子達が困んでいるから」

ああ、と目の前の一本の大きな木を見上げる修二。

「リンがお相手を引き受けてくれたよ」

「輪花ちゃんが？ それって」

「喧嘩をふっかけた、と言った方が早いかな」

「やっぱり。……放っておいても大丈夫なの？」

「仲裁に入ろうとしたんだが、リンの方が俺を追い払ってくれたからな」

「あー……」

あまり修二君に見られたくないんだろうな。萌は日頃の輪花の行動から、らしい理由をピックアップして納得する。

萌の考えている事が判ったのか、苦笑を浮かべながら修二は再び木陰を仰いだ。と、僅かな風が、修二の柔らかな毛質の髪を揺らした。

飯沼修二は、それほどに口数の多い男ではない。

数週間前にクラスメイトとなった彼の双子の妹である飯沼輪花とは比べるまでもなく愛想は極上、それにどうやら人好きな修二は他人を邪険に扱うといった行動は決してとらない。いつ何時、誰に話しかけられても爽やかな笑顔を返す、根っからの紳士だった。

だから一ヶ月と少し前。そんな男から「付き合ってほしい」と持ちかけられた時は驚いた。一緒に居る時、修二は自分にそんな素振りを見せなかったし、そもそもこの男が特定の相手と男女関係を築こうとする事はないと思っていたから。

勿論、自分も、容姿端麗な修二を「よくできてるなー」と眺めこそすれ、その類の感情を抱いた事は一度だつてない。

しかし、突然の言葉に面食らいながらも謝罪の言葉を告げようと口を開いた時、形容しがたいなにかが、彼女の言葉を寸止めた。

なにか 自分の奥深くで、警報が鳴った、とでも言おうか。

そんなこんなで、萌と修二は現在「彼氏彼女」と呼ばれる間柄である。

が、二人の関係性はそうなる以前と、さほど変わり無い。

修二の態度は変化せず、加えて自分の心境が変わったかと言えばそうでもなく。

公表してないからか親衛隊の女生徒達は変わらず修二に付き纏っているし……状況を把握している輪花に至っては常時ツンケンしているが。

恋人が出来るってこんな感じなんだろうか。いつも一緒に居る女生徒達が眺める雑誌に書いてあるような日常の変化は少しも感じられなかった。

冷めてるのかなあ。わたし。

そこまで考えてから、ああ、それでもやはり、と萌は思い直した。確かに、変化はある。

修二と付き合う事になってから、ある人物と過ごす時間が極端に減った。

「修二君、屋上には顔出さないの？」

声をかけると、鳶色の瞳は葉を眺めたままどこか寂しげな表情を見せる。

「最近さらに輪をかけて愛想なしでね。リンに追い払われてから足を運んだんだが」

「やっぱり。足運んでたんだ」

「ああ。だけど哀しいかな、そこでも追い払われてしまった」

溜息混じりに言うと修二は大袈裟に肩を落としてみせた。

飯沼修二は彼を溺愛している。

確かに、修二はみんなに愛想がいい。だが、彼に対する修二の態度は誰の目から見ても格別だった。

必要以上に構いたがるというか。面倒を見たがるというか。一緒に居たがる。というよりは、気にかけているというか。

時には悪質な冗談まで口にして彼をからかっている。

それまで穏やかで大人っぽいイメージしか持たなかった修二の奇行には、親衛隊のみなさんは愚か、クラスメートで出席番号順に並べば近隣の席に当たる。一緒にいる時間の多い萌ですら目を剥く程の意外性があった。

夜。彼と顔を合わせた時に口にしてみれば、なんでも、そうなる直前に屋上で一悶着あったとかなかったとか。

「んもー。人のいい修二君を哀しませるなんて、何考えてるのあいっ」

萌は彼らの関係を『おじいちゃんと孫』と称している。

妙な解釈を抱く者も少なくは無いのだが、萌の目からすれば修二の様子は「初孫相手にデレデレになっているおじいちゃん」のソレ

だ。

ベンチから立ち上がり、怒りに拳を振るわせると、突発的に吹いた風で木々がざわめく中、修二が一言口にした。

「萌ちゃんの事を気にかけているんだよ」

「え？」

「いや」

振り返ると、いつの間にか修二は極上の笑みを浮かべて萌を見ていた。

そんな顔するから親衛隊のみんなが気に病むんだよー。

思わず警告したくなかったが、思い止まった。

ただそこに立っているだけで、これだけ女の子達 だけでは決してない、彼女達をひつくるめた周囲を騒がせておきながら修二には、容姿端麗であるという自覚は驚く程に薄い。

公表していないにも関わらず最近是比较的一緒に居る時間が長い事から、親縁隊の目はどこか萌に冷たかった。

それは構わないのだが、彼女達が少し可哀想な気がして、萌は学校に居る時は修二と二人きりになる事を避けていた。

それでなくても萌は、お兄ちゃん子な輪花を必要以上に哀しませたくないと思っている。

それが、彼女達の関係がいまいち進展しない理由の一つでもあった。

「とにかく、わたし、一言物申してくる」

「あまり強く言わないでやってくれ。ああ見えても、結構ナイーブな奴だから」

「ないーぶ？」

修二の一言に萌の笑いのツボが刺激される。



あいつがナイーブ？

あまりにも似合わない単語に萌は声をあげて笑った。

ああ、でも言われてみれば確かに。

人の言動に対して、必要以上に一人で考え込む所があるかもしれないな。

幼馴染みで付き合いの長い自分ですら気づかないような所を見抜く修二を萌は密かに尊敬していた。

うん。ナイーブかも。

「修二君は？」

「もう少しここに居るよ」

「そう、じゃあ、後で教室でね。改心させて、引きずってくるから」  
「楽しみにしてるよ」

心にも無い事を口にして、修二は萌の小さな後姿にひらひらと手を振った。

階段の踊り場で、萌はいかにも不機嫌そうな輪花に出くわした。

修二と二卵性の双子であるという彼女は、成る程、はつとするような美人だ。

大きな瞳にすっと通った鼻。形の良い顎。それらがまるで精密に造られた人形のように整っている。そんな小さな顔に、すらっと伸びた白く長い足。スタイルまで極上ときた。

しかし何故か、本来なら修二と同じ、白人のそれに近い色をした柔らかなウェーブを描く長い髪を真っ黒に染め、カラーコンタクトまで装用している為、容姿のみで修二との関係性に気づく者は少ない。苗字を知って「もしかして」と感づく者がほとんどだ。

背の高い輪花は、背の低い萌の前に立つと見下すように彼女を見下ろして、

「天沢さん、もしかして修ちゃん知らない？」

開口一番。不機嫌要素の一つを口にした。

「修二君なら、中庭に居たよ」

輪花の高圧的な態度に、さして気に留める事もなく萌は中庭のある方向を指差した。

「そう。ありがとう」

優雅にスカートを翻すとすっと流れる長いツインテール。たんと響く足音に振り返った萌の目に留まったのは颯爽と歩く後姿だった。彼女の足音を耳に美少女だなあなどと感心しながら階段を上

がりかけて、ふと、萌は先程の修二の言葉を思い出した。

「輪花ちゃん、大丈夫だったの？」

「？ なんのことよ？」

手すりまで駆け寄った萌を見上げる強い双黒。辛うじて輪花の姿は萌の位置から見える場所にあった。

「修二君から聞いたの。その、親衛隊のみんなと……」

「ああ。それが？」

「え？ えつとだから……大丈夫、だったのかなあって」

「？ 何ド勘違いしているのかしらないけれど、アタシはただ、彼女達にお引取り願ったただけよ？ 勘の悪い貴女方には判らないかもしれないけど修ちゃんはああ見えて大変迷惑に思っています。ですので、これ以上イメージダウンしたくないのであれば速やかに退散なさった方が身のためかと思いますが如何でしょう とか」

想像通りだった。

「そういえば……今思えば彼女達も何かド勘違いしていた様だったけれど。でもまあ、二、三言口にしただけでアタシの言い分を理解してくれたみたいであっさり出て行ってくれたし、結果オーライでしょう。どの子もその子も頭の回転が悪そうな印象を受けたからもう少し時間がかかるかと思っていたのだけれど」

修二はああ言っていたが、例え相手の中に上級生が居ようと数が多かろうと、喧嘩に成るはずがないのだ。

輪花の品の良さ。慇懃無礼にも感じられる丁寧口調。圧倒的なまでの容姿。そして、口を挟ませぬ程の速さで繰り出す言葉の連打。

そして、彼女は自身の攻撃的な口調と威圧感を醸し出す態度にまるで自覚が無く、加えて飯沼修二以外の人物の抱く感情にはまるで興味が無い。

彼女がこの学校　白羽高校に転校してきて早2週間。

修二と同等の美を誇りながら、何故彼女の親衛隊が結成しないのか。その理由の一つだった。

もう一つの理由は、彼女が超がつく程のお兄ちゃん子だということ…  
…恐らく、そちらの方が広いウェイトを占めているのだろうか。

「輪花ちゃん……もう少しオブラートに包んだ方がいいんじゃないかな……」

「？　理解力の乏しそうな彼女達の頭にもすぐに浸透するように、なるべく言葉を噛み砕いて発言するよう心がけたのだけれど……判りにくかったかしら」

ともすれば四面楚歌な環境を自ら生み出してしまういかねない輪花を影ながらフォローしているのは修二である。

修二の妹である事と、「悪気はないから」という言葉を大半の女子が聞き入れてしまうのだから美男イケメンの力は恐ろしい。

まあ、輪花ちゃんにしてみれば、修二君の事を思つての行動なんだからうけどな……。

苦笑しつつなんでもないと口にする、輪花は首を捻ったまま、修二を教室へ迎え入れるべく階下へと降りていった。

天沢萌は飯沼修二の彼女である。

飯沼輪花にとっては天敵と呼ぶに相応しい立場に居た。

修二の彼女　決して許していい存在ではない。

転校してすぐに、彼女は天沢萌に詰め寄った。

が、彼女は輪花の理解を超える程あつけらんとした人物で、

「これからはクラスメートだね、よろしく！」

憎悪、嫉妬、羨望、それら負の感情を弾き飛ばしてしまう程の満面の笑顔で自分を見上げて握手を求めてきた。

それから早、数週間。

結局、輪花には、修二と萌の関係を破局へ追い込む事が出来なかった。

しかも、心のどこかで萌の存在を認めつつある自分もいる。

「……………変な人よね」

どうにも彼女は調子が狂う。

幾らこちらが攻撃的に出ようと嫌味を口にしようとは全く効果が無い。どころか、輪花がどんなに嫌な人間であろうしてもそれを嘲笑うように　とは言い過ぎか。それを上回る程の笑顔と好意で接してこようとする。いつそあつちも嫌ってくれた方がやりやすいのに、なんて輪花は思ってしまう。

短く切った栗色の髪。寝癖なのか時々毛先が跳ねてしまっているのもご愛嬌。大きな瞳と小さな身体は忙しなく動いてどこか小動物を思わせる。

成績も優秀。運動神経も良い。加えて生徒会に所属している彼女に悪い噂はほとんど存在しない。修二の彼女であるという事実を踏まえてもだ。

公表していなくても、親衛隊もそう馬鹿ではない。輪花曰く、頭の巡りの悪そうな彼女達を敵に廻しているはずの天沢萌は、しかしどういふ訳かその存在を暗黙されているようだった。

ただ単純に、本当に非の打ち所がないのかもしれない。

調べれば調べる程、知れば知る程に天沢萌は、清く正しく明るく

可愛らしい。それこそ少女漫画の主人公のような　絵に描いたよ  
うな『良い子』だった。

当初輪花の頭の中には、天沢萌という存在は『胡散臭い人物』と  
インプットされていた。マイナスイメージがまるで無い彼女に、隙  
の無い人物という印象を受けたからだ。

が、くるくるとよく動く表情。決して嫌味なく控えめに元気な彼  
女は確かに、集団の中にいて良きムードメーカーだった。それは悪  
意を持って接している自分の傍に居ても決して揺るがなかった。

ムードメーカーとは、単に雰囲気盛り上げるだけでは決してな  
く、場に居る人の感情をも和ませてしまう力を持つ。誰にでも勤ま  
る訳ではない事は輪花にだって解っている。

その点で言えば彼女は最強だった。自覚も無く、排除しようと意  
気込んでいた輪花の高ぶる負のオーラをも浄化してしまうのである。  
なんでもないことのように。

自分には敵わないなど、思ってしまった。

「そういうところが。修ちゃんも気に入ったのかしら……」

修二の事は好きだ。

好きというか……この感情はそれ以上のものだった。気がついた  
ら、決して大袈裟ではなく実の兄は自分の総てとなっていた。

理由なんて、もう彼女には判らないし、どうでもいい事。この事  
実と現状だけが彼女を突き動かしている。

だから、小学校も途中から、いきなり自分だけ全寮制の学園に入  
れられた時は途方にくれた。

その時に思い知った。修二を取上げられたら、自分はもう機能し  
ないかもしれない。

そんな修二が好きになった相手というのであれば、……自分が自  
分として生きていく為には許容するしかないのだろうか。

いや。

例え、天沢萌が居ても居なくても、関係ない。  
だって、何も変わらないじゃないか。

「修ちゃん！」

変えようがない。

自分が、修二を好きだという事実は。

中庭の木陰のベンチで、目の前の大木を見上げている修二の姿を捉えた、ただそれだけで輪花の心臓は高鳴った。修二と目が合うと訳もなく気分が高揚した。修二が笑いかけると、隠すことなく歓喜の意を顔中に示したまま、軽い足取りで輪花は修二に駆け寄る。

最近の輪花は、そんな風に考えるようになっていた。

(3)

数名の顔見知りにも声を掛けられ、その度に笑顔で返ししながら、萌は3階分の階段を昇る。

辿り着いた場所は薄暗く埃っぽい。目の前に聳え立つ錆付いた屋上のドアを開けると、一気に心地よい風が流れ込んだ。

眩しさに思わず目を細める。再び開眼すると、広がる青空が飛び込んできた。

快晴。

干上がった屋上は上からも下からも萌の汗ばんだ肌をヒリヒリと焼く。構わず、萌は踏み込んだ。

歩く事数秒。壁の向こうへひよこつと顔を出すとすぐに、無造作に放り出された二本足が視界に飛び込んできた。相変わらずのその様子に苦笑しつつ歩み寄る。

ドアの開く音やら、足音なんかは聞こえただろうに、その人物は目を閉ざしたまま壁にだらしなく凭れ掛かっていた。

「……寝てるの？」

そつと声をかけてみたが返事がない。僅かな風に少し伸びた黒髪が揺れる。

少し考えてから、萌はその隣に腰を下ろした。

屋上唯一の日陰ゾーンであるこの場所は、想像よりもずっと居心地が良かった。冷んやりとした冷たい壁が心地よい。じっとしていると、やがてそよ風が吹いて萌の髪を攫った。成る程。ここは風の通り道なんだ。萌は少し感心する。中庭の木陰より校舎内より、この男が居る場所はどんなにか居心地がよかった。

相田純平は幼馴染みだ。



というより、正確には家族に等しい。

萌が幼い頃、外資系の会社に勤めている両親の短期の海外赴任が決定した。迷いに迷った挙句に両親は友人でもある隣人の薦めもあり萌を隣の相田家に預けた。それから1年の間、萌は相田家の一員。純平の姉として純平の面倒を看っていたのだ。

その後、相田家の妻　純平の母が交通事故で亡くなり、萌は再び自宅で暮らすようになった。両親は一時帰国した後海外に戻り、当初短期となっていた海外赴任は延長が決定する。萌の面倒は田舎から出てきた祖父が看ってくれるようになった。今でもそれは変わらず萌が帰宅すると出迎えてくれるのは萌の祖父一人だ。日本よりも海外生活の方が肌に合っているという両親はしきりに萌に渡米を薦めてきたがこれを萌は幾度となく突っぱねてきた。

元々萌は好奇心が強い。大好きな両親の誘いを断つたのは、海外生活に不安を感じたから、とか、友達と離れるのが嫌だったから、といったオーソドックスな理由ではなく　偏に、隣で寝ているこの男が危なっかしくて心配だったからである。

「……………なんだよ」

ゆっくりと流れゆく雲を眺めていると、横から不機嫌極まりないといった感じの低い声がかかった。

男の子にしては高く、なんだか耳に残る声。こいつにあのアーティストの歌なんかを歌わせたら、さぞかしうっとりするだろうな、……………歌唱力さえ具わっていれば。

「起きてたの」

「起こされたんだよ。つつつか、おまえ。修二に会わなかったのか？」

「会ったよ。会ったから、純平に文句言いに来たの」

「……………は？」

ずっと閉じていた瞼が開く。純平は瞼をしばたたかせた後、半目で萌の姿を捉えた。ちゃんとすれば可愛い顔をしているのに、残念ながらこの男は四六時中面倒臭そうな面をしている。

立ち上がった萌はくるりと振り返ると腰に手を当て、キッと純平を睨んだ。

「修二君を、泣かせるな」

本人は、日頃純平を震え上がらせている輪花の真似をしたつもりなのだが、いまいち迫力が伴わない。

「……………つつうか。女のセリフかよそれ……………」

「幼馴染みとしての忠告。あのね、純平。親友は大事にしなくちゃ駄目なんだから」

「親友なんかじゃない。修二が付きまってくるだけだ」

「……………それ。他の子 特に輪花ちゃんに言ったら殺されるよ？」

「……………つつ」

その光景がリアルに想像できたのだろう。萌の言葉に純平は僅かに顔を青くした。

「ったくもう……………もう少し愛想つてものを身につければ純平だってきつとモテるのに。それこそ修二君に弟子入りすれば？」

「そんなの要るんならモテなくてもいい」

「……………もう」

純平ってばいつからこんな、歯がゆい程の無気力人間になってしまったんだろう。幼稚園の時の……………泣き虫甘えっ子で可愛いかった頃とはまるで別人だ。

「つつつか、万一モテた所で。体質が治らなきゃしょうがないだろ」  
純平はどういう訳か、ツイてない。

そのおかげで、特に恋愛方面において、彼はまるでダメな男に成り下がってしまう。

というのも、運が悪すぎる。偶然が重なった不幸な事故に襲われる確立が驚く程に高いのだ。

スポーツで決めてかつこいいーと思った次の瞬間、他所のボールが飛んできて顔面強打したり。

告白しようと意気込めば当然の如く邪魔が入ったり。

いざデートに行くにも、植木鉢が振ってきたりマンホールに落ちたり、とにかく待ち合わせの場所まで無事に辿り着けないという有様。

やさぐれてしまつのも解る……………かな。少しは……………でも。

風が吹き、揺れる栗色の髪が、俯いた萌の表情を隠す。

「……………純平がそんなだから……………」

とにかく。

なんでもいいから、早く、  
しっかりしてもらわなきゃ……………とても困る。

本人より、誰より……………わたしが。

「？ なんだよ？」

純平は不思議そうに呟くと、上半身を起こして胡坐をかいた。

じつと萌を見上げている。

その邪気のない表情に、僅かにざわついた心が鎮まるのを萌は感

じた。

全く、らしくない。……人のせいにするなんて。

「なんでもないよ、純平の馬鹿」

「は？ ……ちょっと待て。なんで今の会話の流れで、俺が馬鹿呼ばわりされなくちゃならないんだ？」

「馬鹿馬鹿ド馬鹿」

「どばかって……輪花の口癖だろそれ……。つつつか、おまえに言われる筋合いは……」

「あるの！ ほら。もう予鈴鳴ったよ。次の授業ミキティなんだから。遅れたら恐いんだからっ もうフォローなんてしてあげないからね！」

「あ、もうそんな時間か……。って、ちょ……、待てよ……っ」「待たないよーだ」

喧騒が遠ざかり、最後に錆付いた音が響いてドアがゆっくりと閉まる。

何事も無かったかのように風は吹き。日はゆっくりと……しかし一瞬たりとも止まらずに進んでゆく。

それぞれの思惑が絡まり、想いが集結する

あの刻に向かつて。

end

( 0 0 )

それは、黒と白の世界。

境目は曖昧。

君に導かれて辿り着くことが出来た、唯一の場所。

存在を許された空間。

そういえば、もう随分前から意識がはっきりとしない。

感覚は、まるでない。

まるで夢を見ているよう。

あれから一体どれくらいの間、自分はこうしているのだろう。

鮮やかな空の青。

緩やかな白の流れ。

世界を染め上げる紅い光。

闇の中を瞬く、ささやかな輝き。

まるで、海の中にいるかのよう。

泳ぐ事もなく、ただ、ゆらゆらと揺れて、水面に映る景色の変化

を眺めている。

薄桃色の花びらが舞い。

猛烈に照りつける日差しを浴び。

色鮮やかに発色したかと思えば、徐々に色を無くしていく植物達  
やがて。

灰色の空から降りてくる真白に成す術もなく染め上げられてゆく。

当然であるかのように一つの狂いもなく順に繰り返す。

まるで、終わりの無い紙芝居のよう。

泳ぐ事も出来ずに、ただ、ゆらゆらと揺れて、水面に映る風景の  
移り変わりを眺めている。

光は差すのに、温かさを感じない。

揺れる緑は映るのに、大好きな風の匂いも感じられない。

なにもかもが薄ぼんやりとした退屈な世界せかいの中で、しかし、何故  
か音だけは、はっきりとしている。

声だけが、ここまで届く。

だから自分は、気だるさにも似た穏やかな流れに身を任せながら  
も、大好きな彼らの喧騒をこうして眺めている。

君の声が聞こえる。

響いては、心魂を打つ。

だからまだ、この願いは途絶える事もなく。

自分は、ここに在るのだと思う。

> i 6 5 5 9 | 1 0 5 2 <

> i6548 — 1052 <

「今日は……目にも鮮やかなサラダ巻き弁当、か。相も変わらず珍しいチョイスするよね、萌って」

「うわ……すごい、色取り取りだね。この赤とか黄色とか……ひよつとしてパプリカ？　いりゴマのサラダ巻きもすごく美味しそう」

「えっへん。今日のは少し自信作！　……なんで、二人ともよければ全部平らげちゃってくださいっ」

「頭下げられなくてもそのつもり……ってというか、ナマモノ満載なんだけどこれ。大丈夫？」

「家庭科室の冷蔵庫を借りたの。野菜室に入れておいたんだけど……さすがに酢飯固くなってるかも。けど、最近は暑いし。野菜とか萎びちゃうし、仕方なく……ね」

「家庭科室？　それって……いいの？」

「いいのって？　今までだって、デザートがケーキなんかの時は家庭科部への献上とレシピ提供を条件に毎回借りてたんだよ？」

「そこまでするか……萌」

「そういえば萌ちゃん、家庭科部の部長さんと仲いいよねえ」

呆れ顔で萌を見る団子ヘアで勝気な鳴海祐美、苦笑を浮かべた肩までのストリートで控えめな古道由真。彼女達は天沢萌の友人である。三人はそれぞれの机をくっつけて萌の広げた二つの長方形の弁当箱に敷き詰められたサラダ巻きに舌鼓を打っていた。

料理は天沢萌の趣味である。彼女は毎日大き目の弁当箱を三つ用意して、昼休みに振舞っている。その光景に見慣れてきたクラスメイトや、それを知る一部の生徒達は萌の広げるそれを『天沢弁当』と称していた。と、いうのも、彼女が持ってくる弁当は少し変わっ

ていて、高校生が持参するような極一般的な<sup>もの</sup>弁当ではなく、大概サンドイッチやいなり寿司、タコスといった片手で気軽に食す事が出来、なおかつ女性が好むようなヘルシーな軽食ばかりを箱一杯に敷き詰めてくるのだ。ちなみに、三つの箱の内の一つは必ず手作り感溢れるチーズケーキやパウンドケーキといったスイーツ類で占拠されており、クラスの女子群は愚か、萌と同じ生徒会に所属する生徒にも専ら好評である。噂が家庭科部の部長の耳に入り、その腕に惚れこまれてしまっただけからというもの、萌は時々レシピの提供を求められたり、部員達の特別講師を頼まれたりする。

大概『天沢弁当』を食すのは彼女の恋人である飯沼修二だが、彼は自身の親衛隊に拉致されて教室に居ない事が多かった。そうして萌だけで手に負えない時は、購買部常連客、且つ、陸上部に所属している食欲旺盛な祐美と由真、その他クラスメート達が綺麗に平らげてくれる。

「……もはや見慣れて違和感消え失せてる所がまた恐いんだけどさ。この、毎回周り中から『遠足か!』と突っ込みを入れられかねない『天沢弁当』って、作り出したの意外に極最近だよな」

「うん。一ヶ月位前じゃないかな?」

「それにしても突然だったよね。前からお菓子をちょこちょこ作ってきてくれてたから萌ちゃんがお料理好きなのは知ってたんだけど……このお弁当には、さすがにびっくりさせられたよ」

「そなの?」

「そうなの! いきなり萌が大きな弁当箱を3つも机の上に並べ出した時にや何事かと心配しちゃったよ。学年トップクラスの成績を維持する為に勉強し過ぎてついに頭がどうにかなくなっちゃったのかと……」

「なにおう! 言われる程勉強なんかしてないよ」

「でました。優等生の嫌味発言」

「そんなんじゃないってば。第一、このお弁当だって……」



「あ。やっぱり理由あつたんだ？ 頼まれもしないのに毎日弁当3  
〜4人前用意するなんて、料理を趣味とする人間の行動の範疇、ゆ  
うに越えちゃってるもんね」

「うーん。理由と言う程の理由もないんだけどな……えっと……」

二人の好奇心でコーティングされた視線に萌が目を泳がすと、ふ  
と、教室の外を颯爽と歩いてゆく漆黒のツインテールが視界に入っ  
た。

「ごめん、二人とも、先食べてて！」

「え！？」

「ちよつと萌！」

立ち上がるや否や、萌は素早く弁当箱の蓋にサラダ巻きを4つ移  
すと、それを両手で抱えて教室を飛び出した。

「……どうしたんだろ。萌ちゃんって最近、昼休みになると、落ち  
着かない感じだね。お弁当片手に席立つ事多くない？」

「姫のお姿でも目に入ったのかねえ」

残された二人は、サラダ巻きを口に運びつつ苦笑しあう。

『姫』とは、少し前にクラスメートとなった飯沼輪花の仇名であ  
る。

尤も、本人はそう呼ばれている事を知らない。そのぱつと目を惹  
く鮮やかな容姿に転校初日から男も女も彼女に惚れこみ興味津々で  
近づいたのだが、当の本人は周りの抱いた印象を一瞬で凍りつかせ、  
寄せられた好意を吹き飛ばしてしまう程の愛想無しだった。辛辣な  
言葉を並べて、近寄る者を その心をも自分から遠ざけようとす  
る。そんな彼女の様子に周りは御高くとまっている、と囁き始めて  
……以後、飯沼輪花は、誰が呼んだか、気づけば羽高の『姫』とな

っていた。

勿論、良い意味などなく、どちらかと言えば皮肉がたっぷり込められているこの仇名で輪花が呼ばれたことは一度だってない。

「姫さん？ 通った？」

「見てないけど……萌がお弁当持って飛び出すんだもん。そうしか考えられないでしょ？ なんせ天沢弁当って、本当は全部、姫のだもん」

「え？ これ全部？ 姫さんって……実は大食いだったの？」

「そういう意味じゃないって。」

萌から直接聞き出した訳じゃないけどね。解るよ。昼休みになると姫の奴すぐに教室出てっちゃうでしょ？ 一人で。萌ずっと気にしてたもん」

「え？ でも姫さんって、相田君と一緒に弁当してるんじゃないの？ 仲がいいって噂になってるけど……」

「んー真相は知らないけど、多分違うと思う。だって、もしそうなら、別々に教室を出る必要、くない？」

「そっか……じゃあ姫さんってお昼一人で食べてるんだ……。萌ちゃん、姫さんも一緒に、みんなで食べたいんだね」

「まあ、姫の方は萌の事嫌ってるみたいだから完全、萌の片思いね。今日の戦績も不戦敗で終わるんじゃない？ その内いつもみたいに弁当抱えて帰ってくるよ」

「びっくり……。萌ちゃん嫌いになる人なんて、いるんだ……」

「だって姫だし。それに、私思うけど、孤高でクールビューティな猫と、誰彼構わず懐くわんこちゃんとかじゃ合わないんじゃないの？ 相容れない気がする」

「猫と、わんこ、か……。言われてみれば……わからないでも無い気がする」

「でしょ？ 姫と仲良い相田と飯沼も知ってか知らずか、萌たちの事放っておいてるみたいだしさ」

「……でも、萌ちゃん寂しくないのかな？」

「ん？」

「だって、今姫さんの居る場所って、萌ちゃんが居た場所じゃない」  
「あー……」

由真の言葉に、祐美はそういえばと視線を泳がせた。

生徒会、家庭科部に顔を出している萌の交友関係は広いが、しいて上げれば、クラスメートである二人の男子生徒　運なしで有名な相田純平と、羽高きつての美男子イケメンと名高い飯沼修二、彼らとは格別に仲が良かった。彼女らの間を流れる、『席がご近所の間柄』以上の空気を不審に思った祐美が問いただと、萌は、自分と相田純平は幼馴染みなのだの説明した。成る程、そう考えたと相田とつるんでいる修二と仲良くなるのも必然なのかもしれない。

しかし、1ヶ月前。修二の妹である飯沼輪花が転校してきてからというものの、相田は空き時間、彼女に拉致　もとい、呼び出される事が多くなった。そして、余程兄妹仲がよいのか、それともブラコンなのか。飯沼輪花は常に兄の行動をチェックし、彼に近づこうとする者を全力で排除しようとする。最近では飯沼修二親衛隊の活動まで自粛させているというから、輪花の及ぼす影響力は計り知れない。現に、修二の彼女であるはずの萌はどこか彼女に遠慮している節があった。

「ま。いいんじゃない？　萌にはうちらがいるしさ」

「そうだね。きっと大丈夫だよ。萌ちゃんだし。」

「……あ、戻ってきたよ！」

廊下の向こうから足音を響かせて教室に入ってきた小柄な人物が、両手を胸の前で合わせ申し訳なさを全開にした表情でこちらに駆けて来る。

弁当箱の蓋を手にしていない事に顔を見合わせて微笑んだ祐美と

由真は、それには触れずにただ笑顔で親友の功績を讃えた。

「おかえり、萌ちゃん。萌ちゃんの方、ちゃんととつといたよ」

「んで？ 今日のデザートはなに？ うちら、まだまだたっぷり余力あるからねー」

(2)

「……………訳解らない」

「……………は？」

昼休み。

屋上へ上がる階段の下段に腰掛けて、一人、焼きそばパンを味わっていた純平の前に、一定のリズムで足音を響かせて現れた輪花は、不機嫌丸出しで自身の手元 サラダ巻きを見下ろしていた。

サラダ巻きは4つあり、何故か弁当箱の蓋に乗せられていた。

「彼女。訳が解らない」

その一言で、ようやく思考が追いついた。

言われてみれば弁当箱の蓋に見覚えがある。

大方、弁当箱の持ち主が、嫌がる輪花に押し付けたか。もしくは、……………あいつの事だ。「一緒に食べよう」とかなんとか、懲りずにしつこく誘いまくって、ついに輪花が根負けし、その場で考えついた最大限の妥協案がこの状況……………と、こんなところだろう。

「訳わからんってどういう意味だよ？」

「幼馴染みの貴方にこんな事を言うのは悪いけれど、そのままの意味よ。」

つまりは、彼女の頭の中を割って思考回路がどういう構造になっているのか一度見てみたいって言っているの」

「……………まあ、天沢だからな……………」

ボヤクように口になると、純平は半目のまま輪花の不満げな視線を受け止めた。

天沢萌は思考の切り替えが恐ろしく速い。

さつきまで怒っていたかと思えば、次の瞬間にはもう笑う。

落ち込んでいるかと思えば、瞬きの間にもう立ち直っている。

元々笑い上戸な面もあるのだが、幼馴染みで付き合いの長い自分ですら未だに付いていけずに彼女に振り回される事がある程だ。知り合つて間もない輪花が困惑するのも純平は容易に理解できた。

輪花は小さな溜息を零すと、中途半端な距離を置いて純平の隣に腰を下ろした。

屋上へ続く重たげなドアが純平の手によって解放されている。青空の覗く隙間から錆付いた音と共に少し冷たい風が吹き込んで、輪花の憂いを帯びた横顔を長く艶やかな髪が隠した。

「……よくも自分を嫌っている人間に対して、こんなおせっかいが妬げるものよね」

「天沢だからな」

言つて、焼きそばパンを咀嚼する純平を輪花は憮然とした表情で見上げる。

無視しようと思つたが、さすがに居心地が悪くなって、コーヒーで一気に喉に流し込むと、僅かに顔を輪花へ傾けた。

「……………なんだよ」

未だクラスメートの妹をまともに直視する事が出来ないでいる自分が少し情けない。

「さつきからド適当な返事。……貴方、人の話、聞いていないでしょ」

「ンなんじゃないって」

「なら、貴方つて本当に周囲の動きに対して興味ないのね。我関せ

ず、って言うか」

「は？」

「天沢さんが嫌いって言ったのよ？ アタシ」

「聞いてたよ。確かにそう口にしたな」

「……彼女のフォロー。する気ないんだ」

フォローしてほしかったんかい……。

輪花の屈折した想いに溜息を吐く。ここ数日間、輪花と二人で居る機会が多々あったのだが、いい加減気づきはじめていた。この女、相当に面倒臭い性格をしている。

「……俺がフォローして、なにか変わるのか？」

「……そういう意味じゃない」

「そもそも。フォローが必要な程、おまえ、天沢の事嫌ってないだろ」

「…………は？」

猫目と言うのだろうか。少々つり気味で他者にキツイ印象を与える輪花の瞳が見開かれた。

彼女が初めて自分に見せた間の抜けた表情に僅かに驚いた純平は、今度こそ美少女と呼べる程整った細面を正面から直視した。

「………なんか、自覚ないみたいだけど。相手を嫌ってる奴が口にしらないような事言ってた。輪花」

「？ っていうか、どこをどう聞けばそうなるのよ。………その、陰口言ったのよ？ アタシ」

「陰口だったのか？ さっきの。言い方キツいだけだろ」

「………」  
「てか、今日の話ってそれだけ？ なら俺、もう行くけど」

パンの袋を乱暴に丸め立ち上がる。

「そ、そんな訳ないでしょう。って、純平！ 待ちなさいよ！」

焦ったような甲高い大声が校内にキンキンと響く。『（あらゆる意味で）噂の転校生』と二人きりだなんて、こんな状況、他人に見られたらなんと噂されてしまつか解らない。驚いた生徒達が寄ってくる事を恐れた純平は、仕方なく足を止めると段下の輪花を振り返った。

勝手な行動に怒り狂っているかと思いきや、予想に反して、輪花は珍しく弱りきった面をしていた。

> i 6 5 6 6 | 1 0 5 2 <

「……………これ。」

食べるの手伝ってよ。

……………アタシ、こんなに入らない……………」

言って、薄い眉を八の字に寄せた美少女は膝に乗せていた4つのサラダ巻きを改めて純平に見せた。



昼休み終了5分前の予鈴が鳴り響いた。

始業式に出席番号順に振り分けられて以来席替えを行っていないこのクラス。自身に割り当てられた最前列の席に着き次の授業で使用する教科書を出していた萌の視界が僅かに暗くなった。尋常じゃない気配に顔を上げると、何故か目の前で輪花が仁王立ちしていた。目が合っても無言のまま、ただ不機嫌そうに自分を見下ろしている。

気づいたクラスメイト達は、姫の挙動不審な行動に何事かと息を潜めて成り行きを見守っていた。空気の異変の原因に気づいた由真は萌の元へ駆けつけようとしたが祐美に肩を叩かれ足を止めていた。萌の斜め後ろの席に腰を下ろしていた修二も苦笑しつつ状況を見過している。この場に居て彼だけが輪花の一見不機嫌な表情のその真意を読み取っていた。

ざわめきが徐々に引いて やがて、水を打ったようにしんと静まり返った。

誰一人として動きを止めてしまった室内を、無遠慮にすたすたと横断する人物が一人。

ジト目で輪花の姿を眺めつつ純平が自分の席 萌の隣席に腰を下ろすと、それが合図となったのか、輪花の喉がコクリと鳴った。

「……………天沢さん」

「何？ 輪花ちゃん」

重苦しい沈黙の中、当事者である二人のトーンだけが普段と変わらぬ音で響く。

次の瞬間、輪花は後ろ手に隠し持っていた弁当箱の蓋を萌の目前に突きつけた。

目を丸くしていきなり視界に飛び込んできた物体を把握しようとする萌。それを待たずに輪花は突き放すような口調で告げる。

「 今後、食べ物を持参する時は洗わなくてもいい容器に入れてくることね。」

水だけじゃ完全には落とせないんだから……不衛生でしょう」

迷惑気にそう口にする、輪花は何事もなかったかのようにスッと萌の視界から立ち去った。

「えっと……」

残された萌は懸命に状況を理解しようと努める。

受け取った弁当箱の蓋は……成る程。丁寧に洗われたらしく、こびり付いていたであろう汚れが見当たらない。どころか、綺麗に拭かれて水気すら無い。

そして先程の言葉。

今後、食べ物を持参する時は……

つまりは。

自分が容器に気をつけさえすれば、また作ってきた時、彼女は食べてくれるという事だろうか。

……わたしが作ったものでも？

「……………」

律儀に洗われた弁当箱の蓋をもう一度視界に入れる。

これはつまり。彼女は、

自分の事を嫌っている訳ではないのだろうか。

今まで拒否してきたのは、ただ単に……不衛生なのが、嫌だっただけ？

萌がぐるぐると考えを巡らせている間、輪花は萌の後ろの席に腰を下ろして憮然とした表情で教科書を眺めていた。

よく見れば、彼女の耳は何故か赤い。

その隣で修二が輪花から顔を背けて僅かに肩を揺すっている。

「……輪花ちゃん！」

ぐるりと後ろを振り返った萌に、輪花はびくっと細い肩を鳴らした。

大きな瞳をキラキラと輝かせた萌に、輪花は奇妙な物でも見たような目つきになる。

「な、なによ突然……」

大きく仰け反った輪花に、構わず萌は声を上げた。

「明日！ 何がいい!？」

「はぁ……?」

「お昼、明日は一緒に食べようよっ」

「……って、ちょっと待ちなさい。なんでいきなりそうなるのよ」

「? だって輪花ちゃんさっき食べてくれるって……」

「言っていないわよそんな事!!」

……だから、それが天沢なんだって。

ジト目でその光景を眺めていた純平は頬杖を付きながら深々と溜息をつく。

やがてクラス中の視線が自分達に注がれている事に気づいた輪花

は、殺人級の超音波<sup>クラス</sup> もとい、甲高い声で「なに見てるのよ!!」  
と喚く。その取り乱しぶりにたまらず修二は大笑いした。

かくして、これ以後さらにはりきるようになった天沢萌の広げる  
弁当は一段と奇抜さを増すのだった。

(1)

> i 6 5 6 0 — 1 0 5 2 <

7月1日 夏休みも間近な今日は快晴。

今日も今日とて自分が勤務している白羽高校の生徒達は騒々しい。ガキンチョども特に自分が受け持っているクラスの喧しさは別格で、他の教師の顰蹙を大いに買ってしまっていたりする。

だというのに、先日。我がクラスに『羽高の名物生徒』と称される輩がさらに一人増えてしまった。

一体何故、自分のクラスに集中するのか。誰かの嫌がらせか。類は友を呼んでしまっているのか。勿論、答えなどどこにも無く、自分の疑問が尽きる事はない。

とある事情で校内巡回も免除され、ぽつと出来てしまったこの空き時間。いい機会なので、ここに、溜まりに溜まった鬱憤 もとい、我がクラスの愛すべき名物生徒達の事を書き記していこうと思う。

一人目は、天沢萌。

> i 6 5 6 9 — 1 0 5 2 <

レベル的には中の下に位置する羽高において、彼女は生徒会に所属し、且つ、成績は常にトップクラスを維持している優等生だ。

まあ尤も、それだけでは名物生徒などと称されはしない。

どうも彼女は幸運体質らしい。

ぽつと聞くと、一体その何が問題なのだと疑問を持たれそうだが、これはこれでおおいに困りものである。

彼女の幸運は恐らく、人が「運の良い人」と聞いて想像するソレを遥かに上回っている。代表選抜やら係りの割り当てに困った際、

こちらがクジを提案するとクラス中から「不公平だ」という声がかかる程だ。

しかし、とてもじゃないが、生徒達から聞いただけで信じられるような話ではない。数回ほど反対意見を捻じ伏せて、紙を引くものから棒引き、あみだクジまで数種のクジ戦を生徒達にやらせてみたのだが、天沢は噂に違わぬ強運で毎回悉く最良の位置を引き当ててしまった。ある意味無残な結果に周りどころか本人が恐縮してしまい、可哀想な程遠慮しまくって最後には縮こまってしまった。それが幾度続いたか。結果、我がクラスではクジ戦、そして、ジャンケンですらご法度とされ、やむを得ず施行する際は天沢萌が抜けた後で行う事。それが暗黙のルールとなっている。

天沢萌の成績が毎回良いのも、マークシートを総て勘で答えて、それが合っているせいだ……などという、あんまり笑い飛ばせない噂もある。まあそれが真実かどうかは本人にしかわからないが。

次に、飯沼修二。

> i6570—1052<

この野郎に至っては 説明など要らないだろう。野郎を一目見てもらえば解ると思う。

この野郎は何度見たって信じ難い程の美形だ。4月の自己紹介の際、起立した野郎を視界に入れて思わず拍手してしまった程整った容姿をしている。

当然、校内には親衛隊なるものが出来た。野郎が移動する度に女生徒が黄色い声を上げて相当に喧しい。休み時間になると他クラスの女生徒がどやどやと押しかけて時間一杯野郎の周りでたむろしている。……そこまではよしとしよう。

まあ、当たり前的事と言えば当たり前なのだが、話は校内だけに止まらない。

羽高（うちこう）に在籍していない女生徒までもが校内に潜り込むのは大問題である。

……ああ、前言撤回。野郎の周りには明らかに『生徒』と呼べないような年齢の女なんかも混ざっている。

野郎が入学してからというものの、職員会議でその問題が取上げられない日は無い。職員には校内の見回りや見張りといった面倒極まりない仕事が課せられ、それは日を追う毎に強化され、なかなかの重労働となっていた。

しかし当の本人は暢気なもので、声援に対しいちいち笑顔で返すものだからさらに始末が悪い。

奴にはジゴロの素質があると思う。将来安泰だな。

そして、数日前に転校してきたのが飯沼妹　　もとい、飯沼輪花だ。

> i6572—1052<

名からも判るように、校内一のお騒がせ色男、飯沼修二の妹である。しかも、双子。この娘もあの野郎の妹という肩書きに相応しく呆気にとられる程素晴らしい容姿をしている。騒ぎにならない訳がないのだが、彼女の場合は容姿よりも性格に難があり……要するに、愛想のいいイケメン野郎とはまるで正反対の性格をしている。

羽高つちに来るまで、県内でも有名な超お嬢様学園に在籍していた事もあり、彼女の言動や立ち振る舞いは周りから浮いてしまう位に丁寧だ。が、寮生活をしてきた割に協調性がまるで無い。おまけに慇懃無礼とでも言おうか。横柄で失礼極まりない態度に周りの生徒達からは敬遠されている。

そして、彼女は相当な兄貴っ子らしい。兄を取り巻く現状を嘆き、目の敵にされていて、毎日飽きもせず飯沼修二親縁隊に食って掛かっている。おかげで彼女が転校してきてからというものの、飯沼修二に集る女生徒の数は著しく減少した。対応に困っていた職員としては万々歳の事態だった。

しかし、物事そこまで都合よく完璧に収まる訳がない。飯沼妹は女生徒を負かすだけでは気がすまなくなっただか、元々が攻撃的な性

格をしていたのか。とうとう授業の進行妨害をし始めた。授業中、時折すつと手をあげて、それでは説明が不足しているだのなんだのと意見を述べた後、彼女は非常にマニアックな逆質問を教師に投げかける。それにこちらが答えられなければそれでも教師か、だのなんだの。そういうしている内に授業終了のチャイムが鳴り響き……そんな感じで、教師達をも扱き下ろして溜飲を下げるようになってしまった。

おかげで、教師の間では悪ぶったヤンチャな生徒数名を差し置いて、相手をしたくない生徒ナンバーワンの位置に君臨していたりもしている。



(2)

そしてもう一人。

これまでの3人と、他の教師にチクチクと嫌味を言われる要因となるなど、不幸にも彼らを受け持ってしまった至極平凡な一教師としては迷惑極まりない存在なのだが、こいつこそが、自分にとっては最上級に厄介な存在だ。

こいつのおかげで何度こうやって、個性豊かな羽高教員の中でも特に胸糞悪い人物が陣取っているエリア 入りたくも無い保健室までの往復を強制されたかしのれない。

「入るぞー」

引き戸を開けると、保健室のアフロ……もとい、忍木戸教諭おしきとが振り返っては、ピンク色のルージュを薄く引いた口元で人差し指を立てた。

真っ黒な縮毛を際立たせている巨大なアフロ頭。黒人のそれとはいかないまでも日に焼けた浅黒い肌。190センチはあるという巨体が白衣を着て、やけに小さく見える背凭れ椅子に窮屈そうに腰掛けている。

女らしい仕種に眉根を寄せつつ、保健室の奥 締め切られた乳白色のカーテンまで歩み寄る。一気に引くと、黒髪の男子生徒がなんと幸せそうな面で熟睡していた。

盛大に溜息をついてから、一応、様子を覗き込んでみる。身を屈めた拍子に、後ろで一つに結んでいた自身の髪が肩からさらりと流れ落ちた。

相田純平。

極めて平均的な容姿と成績のコイツが、何故名物生徒と称されてしまっているのか。

生徒達の言葉を借りれば、相田は『不幸の申し子』　　どうもこの男子生徒は、天沢萌とは反対に不幸の星の元とやらに生まれてきてしまったらしい。

例を挙げると、コイツの頭上には、ほぼ毎日、何か降ってくる。球系ならまだかわいいもの。例えば、校内に飾られた絵画、例えば教室に掛けられている時計、たとえば図書室の本棚、グラウンドのゴールポスト、美術室の石膏胸像……エトセトラ。今日なんかは、人体骨格模型に押し倒されたらしい。

「……おい。こいつ、爆睡してないか？」

「そつみたいねえ」

私の行動に構わず、忍木戸アフロは机に戻って何か書き物をして  
いる。

「身の丈160センチで十数キロある骸骨と熱い抱擁をかまして卒倒した、と聞いたが……どこも怪我して無いつてののか？」

「怪我らしい怪我といえば……後頭部に出来てるたんこぶね」

「たんこぶ？　後頭部にか？」

「ええ。そう。大方、倒れた拍子にどこかにぶつけたのね」

「……なら、別に私に連絡寄こさなくてもいいだろう」

「と、可愛い生徒の心配一つ口クに出来ない教師の出来損ないのあんたでも一応担任だからねえ……」

「あのな。こいつの心配なんぞしてたらそれこそこっちの身が持たん。入学してから　いや、今月に入って何度コイツがここに抱えられてきたと思ってるんだ？」

「……それに、たかがたんこぶ、されどたんこぶ。頭の怪我は怖いから、養護教諭としては一応、病院に連れて行ってほしいのよ」

「またか。っていうか、何度も言ってるが、子供じゃないんだ。幾ら親と連絡とれんからって、病院くらい一人で行けるだろ」

ギツと錆付いた音を立て、椅子を僅かに回転させた忍木戸アフロは、自分を見て意味ありげに笑む。

「あら。子供よ。まだ未成年だもの。それに子供じゃなかったら……こんなに無防備な健康優良男、放っておかないわよ。あ、た、し」  
「……………おい。相田。いい加減起きろ。もう十分すぎる程知ってると思うが、ここは魔の巣窟だぞ」

一度視界に入れるだけで問答無用で相手を総毛立たせると言われる羽高の養護教諭、忍木戸祝人おしぎとのりと 通称、妖怪オカマアフロの放った強烈な一撃ウイングに全力で背を向けて寝こけている生徒の身体を揺する。

「……………んあ……………、つてあれ、……………ミキテイ？」  
「ふざけた名で呼ぶな」

極稀に発動する貴重な善意を仇で返す可愛げ無い生徒に、神の鉄槌を下してから睨みつけてやった。

「いってえ……………っ なんなんだよいきなり……………」

「その様子じゃやはり大丈夫そうだな。おまえ。午後の授業はいいから、病院行って来い」

「は？ 病院？ ……つつか俺、どうしたんだっけ……………」

拳固で殴られた箇所をさすりつつ半目のまま身を起こす相田。どうも混乱して状況を把握できないでいる様子。

そりゃあ、まあ、仕方ないだろう。なにせ骸骨の求愛だなんて強烈なものを全身で受け止めたのだからな。

しかしこれじゃあ身を挺して想いをぶつけた骸骨も浮かばれないだろう。説明してやろうと口を開きかけた所で、保健室の引き戸が

ガラッと開いた。

> i 6 5 6 3 | 1 0 5 2 <

「忍木戸先生、相田純平の様子を看に来たんですが」

低いがよく通る声が室内に響いて、長身の人物が顔を出した。色素の薄い髪と肌、赤茶けた瞳の見目麗しい男子生徒　途端に保健室のアフロの小さな眼がキラキラと光輝く。

「あらあ！　飯沼君〜！」

手にしていた書類を宙に放り出すと忍木戸アフロは男子生徒にぐねぐねと駆け寄って、うら若き乙女のように両手を胸の前で組んだ。

「どうも。先生、今日もお元気そうですね」

すでに慣れてしまったのか、巨体をくねらせる忍木戸アフロに臆すことなく笑顔を返す飯沼修二。と、突如忍木戸アフロが鼻血を吹き出し、回転しながらその場に崩れ落ちた。

「……………今日も最っ高……………」

悶絶し　最期に恍惚とした表情で呟いて、彼女……………いや、彼は動かなくなつた。

心配して助け起こそうとする飯沼修二を、「いいからいいから」と手をぱたぱたやって制止する。近づいて、踏みつけた主の代わりに訪問客を迎え入れてやった。

「あれ？　美樹本先生。早かったですね」

「まあな。例によって例の如く足元の変態アフロが一大事だと連絡  
寄こしてきやがった。で。そっちは？ まだ授業中だろ」

「ああ。純……相田君が心配だったので、抜けさせてもらいました」

我がクラスを受け持っている生物の担当教師は………女だった  
な。堕ちたか。

飯沼の苦笑に内心舌打ちした。

忍木戸アフロの反応は行き過ぎているが、他の女教師だって自分  
の目から見れば似たようなものだ。

生徒だけでは決して無い。その脅威に曝されているのは大人達だ  
って例外ではなかった。始末が悪い事に飯沼修二は女教師キラード  
もある。兄妹揃ってこいつらは教員の癌であった。

「純、生きてるか」

飯沼修二は自分を横切ると、開いたままだったカーテンの向こう  
を覗き込んだ。

「……………修二……………つか、俺……………どうした？」

「覚えていないのか。いや、実に羨ましい限りだ。なにせ俺はまだ  
シヨックから立ち直れないんだからな。まさか骸骨まで俺のライバ  
ルだったとは思わなかった」

「……………あ……………。なんとなく……………」

思い出してきた、と、盛大な溜息と、ベットの軋む音が聞こえて  
きた。

程なく、頭を抑えた相田純平が無遠慮にカーテンを開けて出てく  
る。

「飯沼。ついでだ。相田を病院まで連れてけ」

途端に至極不満そうな顔になる相田純平の後ろから、爽やかな笑みを浮かべて飯沼修二が歩いてきた。

「いいですよ。というか、なにしろ僕も彼を説得しようと思ってここに来た訳ですから」

成る程。「心配」とは、相田が受診を拒むことを懸念しての事だったようだ。

「毎回毎回大袈裟なんだよ……病院って。見て判るだろ？ 俺はこの通りピンピンしてるっての」

「見た目はな。残念ながら病院って所は、目に見えない箇所の異常を発見してもらう所でもある。という訳で、純。おまえの意見は通らないよ。嫌がってるのを連行して憎まれるのは辛い所だが、それ以上におまえが心配でな」

「嘘付け。おまえその面、絶対面白がってるだろ」

「そんなことはない。楽しんでるだけさ」

「ほらみるおまえやっぱり………って離せ！ 引つ張るな！ 俺は大丈夫だっつってんだろっ 聞いてんのかこら！ 修二！」

飯沼は相田の腕を掴むと強引にずるずると引つ張っていく。

長身の飯沼に対し、体格で負けている相田は成すがままだ。

そうして保健室の引き戸を開けると、相田を廊下に押し出してから、くるりと体ごと自分に振り返った。

「では、美樹本先生。僕は相田君を送ったら戻りますので。後はよろしく願います」

にこりと笑んで、戸を閉める。

しばらくの間、廊下から相田の抵抗の声……いや、叫びが木霊していたが、それも次第に小さくなっていった。

「しっかし。相田君の病院嫌いも治らないわね……」

口調とは裏腹にやけに野太い声に振り返ると、いつの間に復活したのか、忍木戸アフロが自分の隣で腕組みしていた。

白衣に付着した自分の足型はそのままに、優しい表情でドアを眺めている。

「なんだ。生きていたのか」

「当たり前でしょ！ 途中から何事もなかったかのように無視された時はさすがに泣けてきたけどね！」

「ははは。そりゃあよかつたな。しかし、おまえさんだつて知ってるだろ。飯沼はあの通り相田に夢中だ。おかげでおまえさんは見事に床に転がった奇天烈オブジェと化し、晴れて人畜無害となった訳だ」

「よくないわよ！ 人の不幸を笑わないで頂戴！ 大体人畜無害つてどういう意味よ！」

「そのままの意味だろ妖怪。……つて、自覚ないのか……つくづく幸せな奴だな」

「悪かつたわね。あたしは幸せよ！ 世界の中心は自分なんだから幸せじゃなくちゃ救いが無いでしょ！」

「おまえさん、もう40近いんだろ。いつまでもガキみたいな事言ってるなって……」。

……しかし病院嫌い、ね……。相田もまた随分ガキ臭い野郎だな」

苦笑すると、忍木戸アフロはまた、先程の穏やかな どころか哀愁漂う歳相応の顔付きになった。



「……まあ無理もないわね。いつか彼、小学生の頃から病院の世話にならない月は無かったって愚痴っていたもの」

「へえ。あの驚異的な怪我率の高さはガキンチョの頃からだったか……そりゃあ、」

さぞかし親の手もかけさせただろうな、と考えて、相田家の事情を思い浮かべた。

確か相田純平は母親を亡くしていた。父親とは疎遠だったか。

「おかげで、彼。病院でもちよつとした有名人らしいわよ」

「そりゃ、毎月毎月違う怪我でかかっていたら顔くらい覚えられるだろうな。……それにしても飯沼が来てくれて助かった。相田の奴、普段は話す事すらメンドクサイ、って面してやがるのに、いざ病院に連れてこようもんなら文句は人一倍言うからな」

だったら初めから怪我するなって話だ。……まあ、今までの事故を統計すると、本人の不注意以外の要因の……防ぎよの無い事故に遭う確率の方が高いのだから仕方ない話なのだが。しかしそう考えると、毎回かすり傷程度で済んでいる相田は逆に運が良いのではないだろうか。

「仲いいわねあの子達」

「ん？」

「相田君と飯沼君よ」

「なんだ。妬いているのか」

「そうなのよ、飯沼君に愛されて相田君って本当羨ましいな……って 何言わせるのよ」

「否定せん所がまた恐いな……」

「だって……そうじゃない？ 飯沼君って相田君の事情も把握してたんでしょ？ それでああやって我が身の事のように心配して駆

けつけてくれるなんて。あたしが高校生の時、そんなクラスメートなんていなかったわよ」

「……………まあ」

飯沼は普段からあの通り「目に入れても痛くない」並に相田を猫可愛がるし。

相田も、本気で飯沼の差し出す手を振り払わない所を見ると、口で言う程嫌がってはいないようだ。

そういえば天沢と飯沼妹もあいつらを心配して、振り回し、振り回されている感じがある。恐らく飯沼だけではなく彼女らも来たがっていたに違いなかった。

「問題児同士、気が合う……………という所じゃないか？」

奴等はまだ高校生。時間を共有できるのは、最長で、3年間という、長い人生においても僅かな時間だけ。

だが、奴等はこの先 何年経っても相変わらずっている。

なんの確証もなく、唐突に。そんな気がした。

数年後に開く同窓会なんかで、はた迷惑な喧騒を撒き散らすに違いない。なんてったって彼らは羽高の『名物生徒』なのだ。

散々な有様を想像し笑みながら、自分も立ち去ろうと引き戸を開ける。

と、後ろから妙に弾んだ声が出た。

「なら、あたしたちも気が合うつて事じゃなあい？ ミキティ」

「……………変態が独り。寂しさに耐えかねて群れたがるのも解るが、頼むから自分を巻き込まんでくれ。忍木戸アフロ」

吐き捨ててから、どうせ数日後にはまた足を運ぶ事になるであろう保健室を後にした。

自分が受け持った生徒達の総数は、42人。

内、羽高名物とまで称された問題児がなんと全員集結してしまっている。

おかげで余計な仕事は増える一方だし、同僚達には忘れた頃にボキャブラリー貧困な嫌味を連呼されるし、きつと普通に教師やってる人間の数百倍も気が休まる暇も無い、が。

きつと普通に教師やっている人間の数百倍は、楽しみに思う事柄がある。

まあ『退屈』の二文字とすっかり疎遠になってしまったこんな日常も悪くは無いかと。

美樹本梓、25歳。

折角の青空の下、机に向かって頭を抱えつつ、メモ帳に鬱憤を書き散らしながらも、まあ、なんとかやっている。

> i6561 | 1052 <

「……、……っ」

「……ん」

「……て、起きて……ってば……！」

「……っ　　なんだよつるせ……」

「起つきろー！！」

「どわ……っ！」

大声と共に掛け布団を剥ぎ取られ、巻き込まれた身体がベットから転がり落ちた。

「……っつっ……っ」

打ち付けた腰を摩りながら、なんとか瞳を開くと、細い素足が二本、視界に入る。

「いってえな……！！　　なんなんだよいきなり……っ」

「いきなりじゃないっ　　さっきから起こしてるのに、全然起きないんだもんっ　　純平が悪い」

俺から掛け布団を奪い取った犯人は、頬を限界まで膨らました状態で、人差し指をぴつと立てて俺の鼻先に突きつけた。

栗色の、毛先がびんびん跳ねた異様に元気なショートカット。大きな黒目がちの瞳に舌足らずな声。制服を着ていなければ時々小学生に間違われる程身長の低いこの豆狸は……簡単に言えば、隣人だ。さらに詳しく話せば、同じ中学校<sup>がっこう</sup>。クラスメート。つまりは幼馴染

み。名を天沢萌と言う。

昨日寝る前に玄関の戸締りは確認したはずだから……、大方、屋根を伝つてこの部屋の窓から上がりこんだのだろう。

「……………悪いって……………あのなあ。毎度毎度人の部屋に無断で忍び込んだ拳句、散々喚き倒しやがって……………てえか、起こすんならもう少しマシな起こし方ってもんがあるだろ。ちつたあ考えろ」

「だからね？ 優しく起こしてもね、純平は起きないんだよ。絶対。今だって。わたしが何回『おきて』って言ったか。判る？」

「……………ん、と。……………10回位、か……………？」

「純平が悪い」

「……………なんだよその恨みがましい目は……………っつつつか、一体どうしたんだよ、こんな朝から……………。春休み真っ只中だぜ？ ちよつとはゆっくり寝かせてくれてもさ……………」

「やっぱり……………純平、忘れちゃってる……………」

片手で顔を隠すようにして、はあ……………と大きく溜息をつくエプロン姿の天沢。

「そんなことだろうと思った」

「は？」

「いいからっ とつとと着替える！ わたし、朝ごはんの準備してくるから、用意できたら下に下りてきてよねっ」

「……………ぶ……………っ」

言うや否や、天沢は抱えていた掛け布団を俺に投げつけた。瞬間、俺の視界はゼロになる。

「だからなんだってんだ……………よって……………」

視界を遮る布団ものを排除し、見上げたその先に 既に天沢の姿は  
なかった。

代わりに階段を下りる乱暴な足音を耳にして……思わず溜息を吐  
く。

ふと壁掛け時計に目をやれば、針は10時少し前を指していた。

「ったく……なんだってんだよ一体……」

こんな風に、俺の幼馴染み様は、まるで平和を脅かす怪獣のよう  
に、俺の日常を無遠慮に踏み荒らしていく。

俺の名前は相田純平。

この春休みが明けたら、天沢共々、中学二年生になる。

……今度もまた、同じクラスなんだろうか……。

布団を定位置に戻すと、思わず口から溜息が零れた。

……もういい加減、勘弁して欲しい。

俺達は、小学校からずっと同じクラスだった。

連続7回だから、結構すごい事かもしれない。

小学校の……そうだな、5年位までは、ああまた同じか……とい  
った程度で、そんなに気にもならなかった。

けど、……多分、6年からだ。段々周りがやかましくなってきた  
……。  
中学に上がって違う顔ぶれが混じると、天沢と話す度に、周り中  
から冷やかされた。

「おたくら付き合ってるの?」

「は?」

「大概一緒に居るじゃん」

「……天沢が勝手に待ってるだけだよ」  
「またまたあ」

こんな感じの会話が、幾度続いたか。

その度に互いに否定して否定して……天沢は大して気にしてないようだったが、俺にとってそれはひどく面倒臭い事だった。

ただでさえ、不幸体質。一日一不幸。面白おかしく他人に騒がれる事は日常茶飯事で、これが非常にうざったい。

これ以上、からかわれるネタなんて増やしたくはなかった。

だから、最近は極力、天沢の近くに行かない様にしてた。話しかけられても聞こえないフリ。近づいてくれば遠ざかる。一日、一ヶ月、半年と続いて 必然的に学校で会話する事が少なくなった。

天沢は……俺が自分を避けて通る事が気に食わないのか、毎晩人の家の屋根に上がりこんではぶーぶー文句を言ってくる。「最近純平冷たい」だの、「付き合い悪くなったよね」だの、散々な言われ様。先程も口に使っていた「純平が悪い」が、最近の天沢の口癖だ。

そんなことを言われたって、どうしようもない。

どう弁解しようか、そうやって天沢に返す言葉を考える事すら面倒臭い。

いつのまにか、天沢萌という存在は俺にとって最も『面倒臭いもの』になっていた。

「……………別に朝飯なんて。作りにこなくなつて、適当に食つし…  
…」

台所に用意されたトーストとベーコン、目玉焼きを前に、ぼそりと呟くと、またしても天沢の頬が膨れた。

「純平、自炊しないじゃない。戸棚の中はインスタント食品ばかりだし。栄養偏っちゃうでしょ」

「いいよ、別に。腹さえ膨れれば」

「そう。お腹いっぱいになればなんでもいいんだ。なら、いつまでも文句言つてないで早く食べちゃつてよ。その間にわたし、お洗濯やつつけちゃうから」

「……………」

言つや否や天沢は洗濯機のある洗面所の方へ歩いていった。

なんとなく腑に落ちないが、湯気立つ朝食に湧き上がる食欲には勝てず、文句を丸呑みして着席するとトーストを頬張った。

こんな事は日常茶飯事だった。

と、いつものも、天沢は昔 俺のおふくろが亡くなった頃から、家事をする為に毎日のように俺の家に上がり込んでいた。

頼まれもしないのに、目に付くものから手当たり次第に手を伸ばす。こちらが「いいから」と断れば断る程、余計に意地になつてやる。

とはいえ、小さい頃はさすがに家事なんて何一つ出来なかつたら、おやつさん 天沢祖父を引き連れては教えを乞い、自分に来る事だけをやっていた。

大きな掃除機を引きずつて、四苦八苦やっている天沢の姿を見て、



よく彼女を手伝ったものだ。

それが年を重ねる毎に、できる事が一つずつ増えていき　今では家事の総てを一人で担っている。

俺が居ようと居るまいと、2、3日に1回は勝手に俺の家に侵入して、家事を済ませて帰っていく。俺が帰ってくると家には誰も居ないはずなのに誰かが居たような気配がして、台所にはまだ温かいおかずがラップをかけて置いてある、といった感じだ。

理由を聞けば「趣味だから」「純平がやらないから」との事。俺には到底理解出来ない答えだった。

「……………」

目の前を、洗濯物の入ったカゴを抱えた天沢が慌しく通り過ぎる。成る程。俺を起こす前に洗濯機廻してたんだな。

って事は天沢の奴。随分前から家に入り浸ってたんだな……。

「…………… 大変だな」

「純平が悪い」

「いや、頼んでないし。俺」

「むー。頼まれなくてもね？　何日か経つと、頭の中を純平ん家の洗面所の溜まりに溜まった洗濯物が占領しちゃって……とにかく、こっちは気になって、居ても立ってもいられなくなっちゃうんだから」

「どついう理屈だよそれ……」

「つまりはね、生活能力の無い純平を放って置くと、わたしの精神衛生上とっても悪いのっ」

不機嫌に言い放つと、窓を開けた天沢は、晴れた庭へと出て行った。

外から、少し肌寒い風が吹き込んで、目を細める。

そんなこんなで。学校で話さなくなったからといって、家では毎日顔を合わせているし。

俺にとつて天沢萌は……幼馴染みというよりかは、世話好きが度を越して 家族と言っても過言ではない存在だった。

「頼んでないのに……」

天沢萌は……とにかく面倒臭い。

折角の、宿題すら無い2週間の天国。

昨夜も遅くまで、買ったばかりのRPGに熱中していたし……本当なら今日は昼過ぎまで寝ていたかったのだ。

家事だって……天沢が来なけりや来ないで、溜まってきたら自分でやるし……っていうか、天沢が来るからやらないだけであつて、文句を言われる筋合いはない。それに。

ちよつと考えてみれば、すぐに想像がついた。

休みの日の朝。天沢が俺を起こしに来る理由なんて、一つしかない。

「純平、朝食済んだらさつさと着替えちゃつてよ。11時半には駅に着きたいんだから」

……ほらきたよ。

「……なんだよ。俺出かけないぞ？ 今日1日中、ゲームやるつて決めてんだから」

口内の目玉焼きを呑み込んで、開けっ放しの窓に向かって聞こえるように怒鳴り返した。

少しの間後、四角に切り取られた外界から、天沢がひよこつと

怒り顔を出す。

「だめだよっ 今日みんな遊びに行くんだからっ」

手にしたバスタオルをぱんぱんと広げながら、きつと俺を睨んだ。

「は？ みんなって……なんだそりゃ!？」

「そう決まってたのっ だって、どうせ純平、ゲームをする事以外、予定無かったでしょ？ 純平ってば出不精なんだから」

「あんな。好きで外に出ない訳じゃないぞ？ おまえは十分知ってるだろ……俺の運の無さを」

どういう訳か、俺は運が無い。

一歩外に出れば、注意一生、怪我必須。勿論家の中だって例外ではないのだが、物の配置や構造を熟知していて、尚且つ、あらゆる対策が練られている分、外と比べるとまだ危険が少ないのだ。

「そりゃ知ってるけど。だからって家の中ばかり籠ってたらだめだよ。折角のお天気だし、外に出ないと勿体ないよ」

「その返し文句は聞き飽きた。悪いけど俺、今日は本当に出る気ないぞ。今だって、ものすげー眠たいし」

「文句なんかじゃ……って、純平ってば、また遅くまでゲームやってたの？ もー。昨日の夜、今日は早く寝てねって、あれだけ念を押ししておいたのに……」

言われて、昨夜の事 特に天沢と顔を合わせた屋根上での事を思い起こしてみる。

……… そういえば、そんな事もあった、か？

「……… やっぱり聞き流してたんだ。返事はしてくれてたけど、純平、

ゲームの攻略本なんて読んでたしね」

「し、仕方ないだろ。昨日は俺、それどころじゃなかったんだから」

俺にだって事情はある。

なにせ、楽しみにしていたゲーム「ファイナルディスプレイ」の新作の発売日が一昨日だったのだ。発売日に並んで入手した後はずっと……それこそ寝る間も惜しんで没頭していた。昨日の朝はコントロール握りながら居間で寝こけてた位だし。っていうか、あれをやりこまなければ男じゃない。

そもそも、ゲームのことを抜きにしたって、俺は暇さえあれば家で寝ていたい奴だ。

一人で居たい時に、天沢はいつも無理に引っ張ろうとする。

「……ね、純平。お願い、今日だけは一緒に来てよ」

空になった洗濯カゴを抱えた天沢が、食事を終えた俺の前に立った。

片手を前に、お願いポーズで、テーブルに着いたままの俺を見下ろす。

「……………今日だけって。おまえいつもそう言うじゃないか」

「そうだけど。みんなに絶対連れてくるって約束しちゃったし」

どういう訳か。今日の天沢はいやにしつこい。

いつもなら、2、3回断れば、ブーブー文句を言ってはくるが、すぐに諦めてくれる奴なのに。

大袈裟に溜息をついて、不機嫌丸出しに天沢を見上げた。

視線がかち合っても、大きな目は決して俺から逸れる事なく、そのまま見続ける。引く気はないという意思を無言で訴えていた。

もう一度溜息を吐いてから、席を立った。

「純平？」

呼び止める声には振り返らず、皿を持って炊事場に運ぶ。蛇口を捻ると勢いよく水が出て、そこら中に水滴が跳ねた。その様子を眺めながら、背後にやってきた天沢にボヤク。

「みんなって……どうせ連中が雁首並べてるんだろ？」

「……………」

「そんな大勢居るんならさ、俺がいなくたって別に……………」

皿を浸ける俺の声を遮るように、

「いなくっちゃダメだよっ　なんでそんな事いうの？」

一際大きな声が、後ろから響いた。

過剰な反応にびっくりして、そちらを振り返る。

明らかに天沢は怒っているようだった。

「……………な、なんだよ……………？　そんなに怒ることか？」

訳がわからない。

怒りだす理由も判らない。……………っていうか、俺、そんなに変な事、言っただか？

「怒ってなんか無いよ」

だと言っのに天沢は、語る事などにもないといった感じに、つげんどんに言っただけのける。その態度に、いい加減かちんときてしまった。

「怒ってるじゃないか、いきなり大声だして」

「怒ってない」

「怒ってるよ。」

てか、天沢。おまえ勝手に約束しておいて人付き合わせるの、いい加減やめろよ」

「……勝手にって、あのね純平……っ」

「いつもそうじゃないか。俺は一人でいたいつつってんのに」

「！ ダメだよ、一人はさびしいよ」

「そんなの、天沢だけだろ」

「………そんな……、」

天沢の表情が強張った。

俺を見上げる大きな黒目がちの瞳が僅かに揺れる。

………駄目だ。

これ以上言ったら駄目だ。

口を止めなきゃ、と、どこかで微かに声がした。

が。

苛立つ感情を抑えられないまま、俺は天沢に向き直った。

「俺は別にいいって、いつも言ってるじゃないか」

「だめ、だよ………そんなの」

「俺のことだろ。俺がいつって言うてるんだから、いいんだよ。大  
体おまえ、いつもそうだ」

「………純平」

「家事にしたって、起こしにくるのだから。別に誰も頼んじやいな  
いの………文句ばかり」

「………それは」

「自分の考えを人に押し付けるの、やめろよ」

「そんなつもりじゃ……っ」

「そんなつもりなくても、実際そうなんだよ。……俺はおまえに振り回されてばかりだ」

「……純平……」

「……いつまでも昔みたく……、ままごと遊びに付き合ってもらえるかってんだ……っ」

言うだけ言って、天沢に背を向ける。

気づけば、皿を浸けた洗い桶から水が豪快に溢れていた。蛇口を捻って、激しく流れ出る水を止める。

と、途端に室内に静寂が満ちた。

「……」

「……」

天沢は、ついには何も言わなくなった。

図星をつかれて、返す言葉が無いのだろうか。

……いいのか。

そりゃそうだろうな。俺の言ったことは全部真実なんだから。

……真実だったら。……っってもいいのか？

だというのに、さっきから頭の隅でチカチカと、警告音が鳴っている。

怒りで蓋をして、背後に立っている天沢の次の言葉を待ち続けた。

「……」

……。

………つて。

……沈黙、長すぎじゃないか？

「………」

………おい。天沢。

ここはいつもみたいなのに、ガーンと怒鳴り散らすか、軽く「ごめん」で終わるところなんじゃないのか？

「………」

………つつつか……まさか……。

嫌な予感がして、横目でそっと、黙ったまま後ろに突っ立っている天沢の様子を見遣る。

と、抱えたかごに視線を落としていた天沢が口を開くのは、ほぼ同時だった。

………真実だったら。

「………純平は、」

「え？」

「………そんな、風に思っていたんだね………」

「………」

………真実だったら。

踏み躪ってもいいのか？



頭の中の警告の音が、一際大きく鳴り響いて、俺が目を見開いたその時には、天沢はにこりと笑っていた。

「ごめんね、純平」

「.....あ」

「わたし、ちょっとしつこかったみたい」

えへへと、笑う天沢。

いつものように明朗に笑うその顔に、

「.....天沢？」

何故だかとても、違和感を感じた。

「まあ、ね。言われてみれば確かに純平、目の下のクマひどいし。無理させるのよくないか。ただでさえ純平つてば運が無いんだから。これで怪我でもしちゃったら、目も当てられないし」

にこにこと天沢が笑う度に、何故か、胸の奥が重くなっていく。ずし.....ずしと。

重りが積まれていく。

.....なんだこれ。

「うん、わかった。今日は誘ってあげないよ。純平の分まで、みんな楽しく遊んでくるから」

いーっとして、天沢はキッチンを出て行こうとした。

「……………つて、待てよ、天沢」

焦って零れた俺の声に、元気に振り返る。

「今晚は、楽しいお土産話たくさん聞かせてあげるんだからね。後から後悔したって」

自分の中が重くて、

頭の中は真っ暗で、思考も何故か鈍くて。

「しらないんだから」

天沢はただ笑うのに。

「……………別に、後悔なんてしねーよ」

何故かその顔を、直視出来なかった。

( 3 )

間も無く、天沢は帰っていった。

「じゃあね」と笑って扉を閉める。

邪魔者が退散した後、早速俺は居間に入ると、ゲーム機の電源を入れた。

テレビ画面に映し出されるタイトル。

コントローラーを握るとソファに凭れかかって

そうして、何周目かのオープニングムービーを眺めていた。

あれだけやりたかったゲームを前にして、プレイする意欲が何故か湧かない。

この、胸の奥の重りは……罪悪感というやつなのだろうか。

「……………は？」

頭の中にぽつと出てきた単語に、眉を顰める。

「……………なんだよ。罪悪感って」

俺が悪いつてののかよ。

「……………」

……………大体。天沢は面倒臭いんだ。

頼みもしないのに、勝手にずかずかと。俺の世界に踏み込んでくる。

……………。

……………俺の、世界……………か。

カチカチと壁時計の音。

写真たての中の、褪せた世界。  
穏やかで、静かな空気。

広い居間に一人。

ソファの背に後頭部を預けて、四角い天井を仰いだ。

おふくろが死んで。

親父は、人が変わってしまった。

口を利かなくなり、留守がちになって。

必然、俺は一人でいる事が多くなった。

それは、至極、普通で、

すごく、仕方の無い事だと思った。

何もすることがなくて。

何もやる気がしなくて。

自分の部屋の隅っこで座っている事が多くなって。

重い時間に、膝を抱えて丸くなっていた。

その内、朝が来て。

昼が来て、夜が来て。

また朝が来る。

閉ざした青色のカーテンの隙間から陽光が差す。

光の帯に照らされて舞う埃を、なんとなく綺麗だなと眺めながら、

思った。

改めて向き直ってみれば、俺の住んでいた世界 『毎日』は、

その単純な繰り返しでしかなかった。

夜まで終わると、日が一日経ったという事になって、間も無く朝

が来る。

たったそれだけの話だった。

壁にかけられた、大好きなキャラクター物のカラフルなカレンダー

ーを見るのが億劫になっていた。

整然と並べられたこの数字は、一体どれだけ在るのだろう。

この繰り返しは、後どれくらい続くんだろう。  
一体どこにゴールというものはあるのだろうか。  
四角い部屋。色々な物が在る室内。目に映る元気な色。なのに、  
単調な世界。

一人、ただ単純に、そんな事ばかりを思っていた。

「……………んあ」

気がつけば、世界は真っ暗だった。

真っ暗な室内で、ただ、オープニングムービーを繰り返すテレビ  
画面だけが煌々と光を放っている。

「って、おい……………寝ちまつたのかよ……………」

なんてこった。

ソファに寝そべっていた身体を起こして電気を点ける。眩しさに、  
僅かに目を細めた。

すぐに光に慣れ、壁の時計を見ると、時刻は7時を回っていた。

「8時間も寝てたのか……………どんだけ……………」

折角の休み。総てをゲームに費やせる貴重な一日だったのに。

確かに、昨夜は明け方近くまでゲームしていたが、こんなところ  
で、こんな時間まで寝てしまうとは……………。

損した気持ちで一杯になって、頭を掻き毟った。

「……………あー、もう……………」

……………なんか、すつきりしない。

胸の奥は未だに重たいまま。ゲームをする意欲さえ殺ぎ落とされ  
て、結局時間を棒に振ってしまった。

「……………こんなことなら、素直に天沢についてけばよかったかな……………」

朝の天沢とのやり取りを思い出す。

天沢に言った言葉は、全部、本当の事だ。

俺が日頃思っていた　溜まっていた、文句。

今朝のは、それが豪快に溢れただけだ。

……………だけど。

悔しいが、頭の中から天沢が離れない。

真っ暗で掴み所の無いものが、胸の奥の方でモヤモヤしてて、ム  
シヤクシヤする。

ゲームどころではない。

「……………つたく、面倒臭え」

ゲームの電源を切ると、庭のつつかけを履いて、俺は隣へ走った。

天沢は、おやつさん……………天沢祖父と二人暮らしだ。天沢の両親は海  
外に住んでいる。

天沢が豆狸なら、その爺さんであるおやつさんは……………ほら、どっ  
かの店先に置いてある大きな黒い狸。あれとそっくりだ。

おやつさんはそれはそれは厳しい人で、天沢の家には門限という  
ものまで存在している。平日は18時、休日は15時。ちよつとで  
も過ぎてしまうと、天沢は散々雷に打たれた後で、一週間の外出禁  
止令を食らってしまうのだ。

俺は隣の家に行くと、チャイムを鳴らした。

この時間なら、天沢は帰ってきているはず……、

「……ん。なんじゃ。純平か」

ドアを開けて出てきたのは、黒狸な爺ちゃん　おやつさんだつた。

「……れ？　おやつさん？　天沢の奴、今、手が離せないのか？」

俺の顔を見上げて、怪訝の色を浮かべる。

「萌なら、まだ帰つたらんが……。それより、おまえ。なんでここに  
いるんじゃ？」

「は？」

「今日はおまえの誕生日だって言うから、特別に門限を8時まで延ばしてやったんじゃぞ？　なんじゃ、帰りは別々だったのか？」

「……………」

たん、じょうび？

「なんじゃ、普段以上に間の抜けた面しておって」

「……えっと、その……………すんません。すっぱかしました」

呆然としたまま、なんとか発した俺の言葉に、ピクリと僅かに身体を揺らしたおやつさん。

間も無く、小さな体からドス黒いオーラのような何かがゆらゆらと立ち昇った。

「……………そーか。  
我が孫の誘いを跳ね除けるとは……………純平。おまえ、いい度胸じゃ  
のう……………」

はっと気づいた時には、もう遅かった。

怒りの炎 いや、怒りの炎の中を泳ぐドラゴンを背負ったおや  
っさんが、般若のような面で、俺を見下ろしていた。

「見下ろした」とは、別に過言ではない。

おやっさん……………背が低いのに、いざ怒らせるとたちまち巨大化し  
やがるんだよなあ……………ははは。



(4)

おやっさんに一発重いのをかましてもらった後、「萌を迎えに行け」とのご命令に背けるはずもなく、言われるがまま俺は駅へ直行していた。

時刻は7時半過ぎ。

改札口の見える位置で、壁に凭れ掛かる。

遠くの照明がぼんやりと照らす世界。

喧騒の中、なんとはなしに、人の流れを眺めていた。

「……………」

久々に強烈なおやっさん拳固を落されて、胸のモヤモヤは少し治まっていた。

今日はおまえの誕生日だって言うから……

忘れていた。

前日か、……それこそゲームの発売日の広告で、誕生日が近いという事は目にする度に把握していたが、ゲームに没頭していた事もあり、すっかり忘れてしまっていた。

いなくっちゃダメだよっ　なんでそんな事いつの？

お怒りの原因はそれか……。

大方、連中と組んで誕生日パーティの計画でも立ててくれていたに違いない。

それならそうと言ってくれればよかったのに……。溜息をついた後、天沢のことだからサプライズでも狙ってたんだろうなと思ひ直す。

おふくろが亡くなった後、誕生日というものは俺にとって特別なものでは無くなっていった。

大体春休み中に来る誕生日なんて、同級生の誰も覚えていないわけがない。

しかし、天沢だけは俺の誕生日に敏感で、毎年おやっさんをも巻き込んで、俺を家から追い出しては、部屋中に飾りを施して、こっちが引く程一人で盛り上がっていた。その姿は、当事者である俺よりも楽しんでいるように見えた。

しかし、冷静になってよく見れば。

その姿は、どこか必死で。

俺がっられて笑うと、なんだか祝ってくれている天沢の方が嬉しそうだった。

おふくろもイベントには力を入れてたから。あれで、おふくろの代わりに務めているつもりだったのかもしれない。

そういえば、天沢の奴。死ぬ前にお袋がいきなり付け始めた「相田家家訓」なるノートを熱心に読んでいたっけな……。

別にノートの中身は大したこと無い。「一日三回歯を磨こう」「だの」「ご飯は良く噛んで食べよう」だの、幼稚園先生なんか子供に教えるような事がつらつらと書かれてあるだけだ。

その中には確か、「イベントには力を入れよう」なんてのもあったかもしれない。

「どうしたの？ 純平」

唐突に降って来た高音が、俺の意識を現実に戻した。  
気がつけばいつの間にか、間近に天沢が立っていた。

朝見たラフな格好とは違い、ひらひらのレースの付いたキャミソールに短パン、小ぶりのヘッドのペンダント。キラキラした二つの髪留めでクセ毛を押さえ、止めに華奢なサンダルなんて履いている。

よそ行きの天沢が、大きな瞳をさらに見開いたまま、不思議そうに俺の顔を見上げている。

「……なんでこんな所にいるの？」

「……………別に」

なんとなく、気恥ずかしくてそっぽを向いた。  
と。

ずっと天沢の片手が伸び、俺の前髪を掻き上げる。

「怪我してる」

天沢に言われて、ああ、と思い出す。

おやつさん拳固直下の後、天沢の家から飛び出してから間もなく、履いていたサンダルが唐突に壊れた。

足の甲に当たる部分が取れてしまったのだ。

思いつきりバランスを崩してよろけた　丁度その時、こちらに向かって走ってきた自転車を無理に避けようとして……近くに立っていた電柱に額をぶつけた。こんな訳である。

渋々事情を説明すると、笑い上戸な天沢はたちまち声をあげて大笑いした。

笑って笑って、俺の顔を見ては笑って、周りに注目されてもさらに笑って……ようやく発作がおさまった後で、

「大丈夫？」

と、何事もなかったかのように訊いてきた。

「……………大丈夫じゃない」

目線を合わせずに、その場にしゃがむと、

「うそ。病院行く？」

天沢は膝に手をついて屈むと、心配そうに覗き込んでくる。

僅かにそちらを見る。天沢を何故か直視出来なくて、思わず無然とした表情になってしまう。

「……………怪我じゃない」

「ならない？」

つつけんどんな物言いに、それでも天沢は食い下がってきた。

「……………」

「純平？」

どこまでも無邪気な瞳に、観念して口を開く。

「……………今日」

「……………ん？」

「……………どこ行ってたんだよ」

「……………」

天沢はしばらく、黙って俺を見ていた。

気まずくて、そっぽを向きながら早く離れてくれないかなと考えていると、その内、すっくと立ち上がった天沢。

俺の隣に來ると、彼女は再びその場にしゃがみ込んだ。

そのまましばらく二人して、人波を眺めていた。

人工の音……人の立てる音。エンジン音、電車の声……人々のざわめきが俺達の前を通り過ぎる。

俺達の姿に気づかないのか、誰も俺達を視界に入れない。気にも留めない。

曇天に隠れて月も見えない。星の代わりに電光が真っ暗な街に大きく咲く。視界の隅に目をやると、それぞれの光に小さな虫が集っていた。

世界をポーッと眺めていると、徐々に、心が鎮まっていくのを感じた。

「カラオケ」

天沢が、正面を向いたまま、ボソッと声を上げる。

「え？」

「6時間耐久カラオケだよ。クラスのみんなで」

「……………」

「……行きたかった？」

「……全然。……むしろ、行かなかった自分に、乾杯したい」

「あははは」

からからと天沢が笑う。

その横顔を見て、ほっとした。

今朝感じた違和感は、もう無い。

「…………天沢。…………あのさ…………俺……………」

「じめんね」

「……………は？」

言おうとしていた言葉を先に言われて、思わずそちらを見遣る。先程まで明朗に笑っていた天沢は、膝を抱えて俯いていた。

「何、謝ってるんだよ？ おまえ、謝る事なんて何も……………」

「…………純平、少し寂しそう」

「べ、別にそんなんじゃない……………」

「こんなはずじゃ」

腕の中に顔を埋めて、表情を隠して、

「なかったのになあ……………」

そうやって溜息混じりに呟いた言葉に、どうしようもなく、胸を締め付けられた。

「……………天沢」

いつも俺を引っ張りまわしていた元気な体が、小さく見える。その姿は、儂くて。今にも消えてしまいそうな印象を受けた。

「……………」

唐突に、莫大な不安を覚えた。どうしてだろう。

否、決まっている。

天沢がいなくては、この世界は保てない。

単調な世界を土足で踏み荒らして、

俺を外へ 光の中へ連れて行ってくれたのは天沢だった。

どんなに暗い闇の中にも、隙間を見つけて、手を伸ばすように差し込む、光の帯のように。

必死に手を差し伸べて、俺を引っ張り上げたのは天沢だった。

単調な世界に、変化を。

モノクロームだった視界に、好き勝手にメチャクチャな色をつけていった女の子。

「……………本当、振り回すよな。おまえは」

「え？」

俺の言葉に、ぴよこつと顔を上げる天沢。

大きな瞳は僅かに、不安で翳っている。

「うそ。わたし、また何かした？」

「ああ。した。悪い意味でも、……………いい意味でも」

「……………いい意味？」

訳がわからないと言った風に、天沢が小首を傾げる。

どこか小動物を思わせるその仕種に思わず笑ってしまった。

「いいよ」

「……………？」

「いいよ。例えば今日みたいに俺がキレようが、荒れようが、……………」

「……………好きなだけ、振り回せば」

「……………」

俺は一体、どこで間違えたんだろう。

面倒臭いのは天沢じゃなかった。

面倒臭いのは、周りや俺自身で、天沢は面倒臭くなんか無い。俺、きつと、天沢に甘えていただけだったんだ。

……………。

……ガキかよ。俺。

「……………わかった」

天沢は一言口になると、ずっと、立った。しゃがんでいた俺に手を差し伸べる。

「とりあえず。家帰るとね、昨日作ったケーキがあるんだ。それ、1ホール全部食べてもらおうから。おっけー？」

いつもの笑顔で、俺を見下ろす。

苦笑して、その手をとった。

小さくて、少し冷たい手。

引っ張られてよいしょと立ち上がったから、ジト目で天沢を見る。

「あのな。おまえの作るケーキってのは、あれだろ？ 毎年出てくるあの、でけー生クリームのケーキ。

全部、は、無理だ。手伝え」

「えー。だって純平、去年だって切り分けた半分しか食べなかったじゃない」

「知ってるだろ。俺は甘い物は苦手なんだよ。少しは加減しろ」

「だめだよ。おばさまのノートにもあったでしょ。甘さと大きさは愛情に比例してるんだから」

「そんな重い愛はいらん」

「あー。ひどいんだ！ そんな可愛くない事言うんなら、もう作っ



「てあげないからっ」

「ああ、そう願いたいね」

「本っ当可愛くないのっ」

「可愛くなくて結構」

歩き出した俺の後を、天沢がついてくる。

天沢の小幅に合わせて、穏やかな気持ちで帰路を歩く。

流れる空気は、幼い頃から変わらず、

毎日繰り返してきた、日常という、俺達の世界だ。

しかし。

それがどんなに、かけがえの無いものだったのか。

俺が気づくのは、まだもう少し先の話だった。

\*

> i 6 5 6 4 | 1 0 5 2 <

天沢 萌「さてさて。いかがでしたでしょうか。このSS。c10 ver入門編という事で、特に読んでいなくてもゲームをプレイするには支障ないそうですが、読んでいたならさらにゲームを楽しめる！、……………って言うてましたけど……………まだゲームをプレイしていないわたしにはちよつとわかりませんっ あはははは」

相田純平「……………あー面倒臭い面倒臭い……………。やあつと終わったか……………」

天沢 萌「……………また純平は……………んもー、そんな隅っこでへちヨつてなつてないで、主役なんだから……………こつち！ で、こういう時くらいはしゃきつとしてよ、しゃきつとっ」

相田純平「しゃき、ねえ……………。まあ、わざわざ俺が出張らなくてもさ。ゲームに出てこない奴等が出張つてたからいいじゃないか。鳴海に古道、忍木戸アフロに、やつさんとか。ミキティだって、短編じゃ一話主役はつてたけど、ゲーム中じゃムーンウォークしかしてないだろ」

天沢 萌「あはは……………あれはムーンウォークじゃなくてね。なんか……………ちやんと訳があるらしいよ？」

相田純平「そうなんか？ こないだ主役の特権！ ………………つてことで、一足先にゲーム、テストプレイしてみたんだけど……………ムーンウォークにしか映らなかつたが……………」

天沢 萌「うーん……やっぱりゲームやってないわたしにはよく解らないけど……ああ、そういえば。知ってた？ この短編集、一話削られたらしいよ？」

相田純平「え？ 誰の話？」

天沢 萌「うん。輪花ちゃん主役の話だって。なんでも、純平と絡んでた、とか」

> i 6 5 6 5 | 1 0 5 2 <

相田純平「げ。そんな話まで用意してあったのか……。どうせ、輪花が怒り狂う話だとか、それで俺が死にそうな目に遭う話だとか、そんなんだろ……。よかった……」

天沢 萌「……絶対、違うと思う。(汗) なんでも、ネタばれになっちゃうとかで、このclover00では出来なかったんだって」

相田純平「『では』？ ……『では』とは……」

天沢 萌「うん。ゲーム配布後、シナリオの人がまた書くって言ってたよ。cloverのSS」

相田純平「……は？ ……なんで!？」

天沢 萌「さっぱりゲームやってないわたしにはよくわからないけど、アフターケアなんだって」

相田純平「はあああ……マジかよ……折角、ゲームもSSも終わって晴れて自由の身になった！……と、思ってたのに……」

天沢 萌「はいはい。もう少し頑張ろうね」と、いう訳で。ゲームlover、おかげさまで制作順調です。このままいけば9月の後半くらいにみなさんにお会いできると思いますので、もしこれを読んで興味を持たれた方がいらっしやいましたら……」

相田純平「いない、いない。いないって。そんなん」

天沢 萌「もー純平っ……すぐそうやって水差すような事言っ……」

相田純平「だってあのゲーム。ただの音付き小説みたいなもんだしな。別に特別面白いって訳でもなし。あれをやるくらいなら俺は某ゲームの新作の方をおすすめ……」

天沢 萌「……そんなこと言って。どうせ、純平。ゲーム中に恥ずかしいセリフ連発してるからプレイしてほしくないだけだよ」

相田純平「は！？……あ、まさわ……、おまえ！……まだやっていない……つか、ゲーム自体まるで興味が無いって奴だったんじゃない……！？」

天沢 萌「うん。やってないよ。ゲームにも興味はないけど、clearはわたしたちの話だし。それに、このあいだテストプレイした修二君がすごく喜んでたから、少し見てみたいかなあって」

相田純平「……、……あー……、」

天沢 萌「よし。純平が大人しくなった隙に……と。そういう訳なのでみなさん。ゲームcloverは2009年9月頃配布予定です。もしもなんらかの事故でゲーム配布が出来ない状況に陥った場合でも、小説として出すそうなので、どうかよろしくやってくださいっ 特に各章の後半、純平が恥ずかしいセリフをたっくさん叫んでるそうですっ」

相田純平「おい……天沢……っ 余計な事吹き込んでんなよ!？」

天沢 萌「純平が悪い。……ではみなさん、また9月頃、お会いしましょう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8358g/>

---

clover00

2010年11月13日18時12分発行